

九州支部

治療法による生存率に有意差はなく、特に高齢者肺癌の治療法について、今後検討が必要であると思われた。

62. 小細胞肺癌の治療成績について

鹿児島大放射線科 宮路紀昭
 小山隆夫, 向井浩文, 内山典明
 阿辺山和浩, 伊東祐治
 中條政敬
 鹿屋病院放射線科 小野原信一
 荻田幹夫
 田之畑クリニック 田之畑修朔
 今給黎病院放射線科 堀地 悌
 大久保幸一

1981年1月より1991年1月までの間に治療されたSCLC 65例の治療成績を検討した。男58女7, 37~86歳(平均65歳), 病期はI 2, II 4, IIIA 9, IIIB 28, IV期22例, LD 41例, ED 24例。化学療法(BAI=32) 58例は, CDDPとVP-16, CAV, EP療法が多く, BAIはCDDP単独が最も多かった。化学療法でCR 21%, PR 70%, 放射線治療でCR 50%, PR 50%でLDの2年生存率 26%(MST 13カ月), ED 0%(MST 5カ月)であった。初回再発は脳転移が最も多く9例であった。

63. 腺扁平上皮癌の臨床的検討

長崎市立市民病院内科
 高谷 洋, 福田 実, 福田正明
 笹山一夫, 中野正心
 対象は昭和50年から平成元年までに当院に入院した原発性肺癌621症例中10例(1.6%)であり, 男女比は7:3, 平均年齢は63.4歳であった。喫煙歴は8割にあり, 喫煙指数は平均で990。発見動機は, 症状ありが5例, 検診発見例が2例, 他疾患経過観察中が3例。胸部X線は一例が浸潤影で, 他は末梢腫瘤型であった。確定診断は喀痰

細胞診では1例もなく, 経気管支的肺生検で1例, 経皮的肺生検で1例などであった。臨床病期は1期が3例, 2期が2例, 4期が5例で, 治療法は手術例が5例, 化学療法例が5例。手術例5例ではIIIA期の1例を除いて生存中である。剖検例3例では死因は全例呼吸不全で転移は多臓器にあった。

64. 原発性肺癌-気管支喘息との合併症例の検討-

大分県立病院第3内科
 鳥谷 弘, 山崎 力, 野村邦雄
 岸川正純, 細川隆文, 廣岩香織
 過去10年間に当科で経験した肺癌・喘息合併例は6例(4.0%)で, 同一期間内の全喘息症例の0.67%に相当した。atopic, non-atopic各1例, mixed 4例で, 重症度は軽症1例, 中等症5例であった。肺癌の1例(♀)は住民検診で発見されI期であったが, 男子5例はIIIA 1, IV期4例であった。組織型はSq 3(♂2, ♀1), Ad 2, Lc 1例で, 全例喫煙歴を有し, B. I. は高値を示した。両者の合併頻度は低いとされるが, 喫煙, 吸入粉塵の影響も示唆された。

65. 近年における原爆被爆者肺癌症例の検討

日本赤十字社長崎原爆病院外科
 中尾 丞, 藤瀬直樹, 遠近裕宣
 石井俊世, 柴田和行
 同 内科 崎戸 修, 伊藤直美
 同 放射線科 大坪まゆみ
 福島藤平
 同 病理 高原 耕
 1983年から1990年までに当院で扱った肺癌症例非被爆者73例, 10km以内被爆者59例について, 臨床的, 病理的検討を加えた。年齢, 病期には両群に明らかな差異はなかったが, 女性の被爆者は腺癌が多い傾向がみ

られた。非手術例(86例)では両群とも3年以上生存はほとんどなかった。手術例(44例)の7年生存率は, 非被爆者75%, 被爆者55%であった。被爆者はリンパ球数が少ない傾向がみられた。

66. SIADHにて発見された肺小細胞癌の1例

国立長崎中央病院内科
 藤原千鶴, 峯 豊
 後藤嘉樹, 森 正孝
 同 外科 松尾和彦, 草場英介
 同 放射線科 森川 実
 松岡陽治郎, 天本祐平
 同 病理 藤井秀治
 症例は62歳女性。悪心・嘔吐・頭痛等SIADHの症状にて発症。胸写上無所見であったがCTにて腫瘍が認められ, 開胸肺生検にて小細胞癌の診断を得た。化学療法, 放射線療法にて腫瘍は消失し, 症状も改善した。

67. Lambert-Eaton Myasthenic Syndrome (LEMS) を呈した Small Cell Carcinoma の1例

鹿児島大第3内科 長濱吉幸
 川畑政治, 有村由美子
 有村公良, 納 光弘
 阿久根市民病院 吉嶺厚生
 症例は67歳男性。平成2年の初め頃から下肢の脱力を自覚し, 以後徐々に症状悪化し上肢の脱力もきたし, 同年5月当科入院。LEMS及びmalignancyの検索を行い, 右肺S₆に腫瘍を認めた。生検で肺小細胞癌と診断, T₁N₁M₀ stage IIとして6月14日右肺中下葉切除術を施行。その後化学療法(PVP-CAV)を2クール行った。臨床症状と腫瘍マーカーに加えて, 筋電図所見が経過観察を行う上で有用であった。